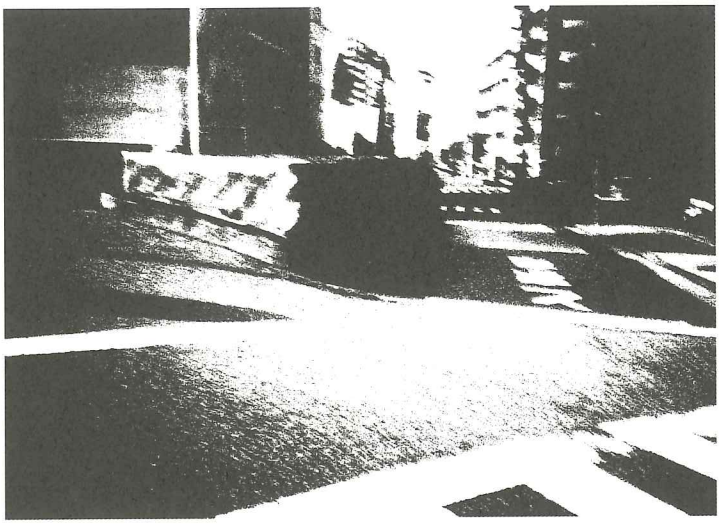
人間はどこまで非人間的になれるのか



辺見 庸
hemmi yo

昨年（二〇〇一年）の九月十一日というのは、とてつもなく大きい出来事だったし、九月十一日をきっかけにして、驚くべき出来事が相ついで出来しました。しかし、私は九月十一日の前と後で人類社会が一変したとは全然思っていないんです。九月十一日以前と九月十一日以降というのは、本質的には何も変わっていないと思います。

九月十一日というのは、僕の言葉でいえば「試薬」ですね。それも毒性の強い試薬だったと思います。この劇薬によって、人間社会の幻想のベールが剥ぎ取られ、それまで目にすることのできなかったというか、しっかり正視しようとしなかった人の世の実相、つまり本来の貌が露出してきたということだと思います。われわれはいま、自分本来の貌を見せつけられて、意外なその醜さに驚いているのではないでしょうか。

例えば、われわれが心のどこかで信じていた民主主義というものの驚くほどの暴力性、それから近代国民国家といわれたものの偽善性、あるいは人間のもつ無慈悲、残酷さ、つまり人間の非人間性ですね。それから、いわゆる知というものの無力、宗教というものの行き詰まりと荒廃、そういうものを全部さらけ出したと僕は思っているわけです。これがわれわれの世の中の実相なのだと思います。

僕らは植民地主義とか、あるいは近世とか中世という過去の闇というものは、当然もうなくなったと思っていたわけです。しかし9・11という試薬をかけられて、事実上まだそういう闇がたくさんあるということがわかってしまいました。

人間の無慈悲ということを言いました。人間の非人間性です。それは9・11という同時多発テロもそうであっただろうし、それ以上

に米英列強のあのすさまじい報復爆撃というものも非人間性というものを示している。まさに「人間はどこまで非人間的になれるのか」という二十世紀以来の一大テーマをわれわれはいまだに解明できずにいます。

9・11以前に、例えばアメリカのグローバル化とか、アメリカが世界各国でおこなっている国家テロ、謀略、転覆工作というものも、人間の限りない非人間性を示したと思います。しかし、それがアメリカとか、あるいは一部の中東のテロリストたちだけが非人間的かというと、私はそうは思っていません。それを傍観して見ているような、われわれの内面にもっと重大な非人間性というものがあるんじゃないかと思います。僕は、人間とは本然的に非人間性を併せもった非整合的な存在じゃないかと思うんです。

ですから、「人類が民族・宗教を超えてひとつになり得るか」というようなことは、考えたこともないですね。僕は予見できる将来において、そんなことは絶対にあり得ないことだと思います。逆説的ですが、だからこそ、宗教というものがあるし、哲学もあるのだろうと思っています。もし、人類がひとつになれる、人間の総体が人間的でいられる――そうした確信があるのであれば、宗教はいらないのではないでしょうか。むしろ私は逆の事態を予感します。この先、もっとひどい、悲惨な時代が来るのではないかと予想しています。「人間はどこまで非人間的になれるのか」のテーマから抜け出すことはしばらくできないでしょう。まさに二十一世紀は、人類社会の知というものが最も過酷な試練を受けるであろうと思います。

今年（二〇〇二年）七月二十二日、イスラエルがパレスチナのガザ地区の民家の密集地に一トン爆弾を落としました。一人のイスラム原理主義の指導者を暗殺しようとして、数百人の死傷者が出るということを承知で一トン爆弾を投下したのです。アメリカは誤爆だと言うけれど、アフガンで結婚式の披露宴をやっているところに爆弾を落として、数十人の死者を出した。まったく理不尽です。ひどい話です。が、国際社会は、それでもほとんど動かないでしょう。

それなのに、何で宗教が和解したりできるんですか。和解する努力もしていない。宗教は腐敗しています。根底から腐敗していると思いますね。世界を歩くとよくわかります。特に、日本の宗教はほとんど腐敗の極みじゃないですか。戦場で、戦闘を「やめろ！」と言っている宗教者らを僕は見たことがないです。ボスニア・ヘルツェゴビナにも行ってきましたけれど、むしろあの時も宗教界は戦争の後押しを事実上してしまっていた。

総じて人間は重苦しいことや、現実にある悲劇というものを見たがらないものなんじゃないですか。それは人間の性質だというふうに思います。マスコミという機能も、なるべく見ないで済むような装置を作っている。それを見ようとするところから、何かが始まるということは事実だと思います。ただ、そんなことは言うは易しでね、実相を実相として認めることはとても難しい。

ただ僕は思うんですけれど、やはり全体が、マスコミも教育界も、われわれのような作家の世界も宗教の世界も、言いにくいことを言わなくなっているんじゃないですか。それが日本のファシズムみたいなものだと思います。「そこまで言うことないだろう」という世界で生きていると思うんです。でも、僕はそこまで言うべきだと思っています。

いま、世界というものを考えるときにどうしても出てくるのが、エスノセントリズム（ethnocentrism＝自民族中心主義）という考え方です。この「エスノ」というのは「民族の」という意味ですが、自民族を中心にしてものを考えていく考え方は、エスノだけじゃなくて、宗教も組織も会社も国家もそうなんですね。ここをほどいていかないと、何事も論じることはできない。何派は何派よりもよい。自派は他派よりもよいというふうに、学生の小さい組織から大きな企業、国家規模にいたるまでみんなそう思っているわけです。

でも子細にそれを点検していくと、個体差のほうが大きいわけです。組織よりも個体差のほうがよっぽど大きいと思います。だからもっと根源の眼というものをもたないといけない。根源の眼をもったら、言説の質が変わってきます。根源の言葉は相手の深い所に届きます。また、言った限り必ず返ってくるもので、向こう傷を負わざるを得ないものだと思います。無傷で絶対安全圏から言っているような話には、やはり真実味はないものです。

根源の眼というものが、本当の知だと思うんですね。ただ、その出発点は、やはり内面の「個」だと思います。ですから、帰属する組織やいわゆる宗派というものから解き放された「個」の発見から出発するんです。自分の「個」にどういうふうにしっかりと向きあうかということの方が、いわゆる宗派・組織・企業の問題よりも大きいと思います。

僕が戦場に行ってみて思うのは、自分という存在がいかなるものも代表し得ないという気持ちなんです。たくさんの死体に立ちあう場合、自分は何ものでもない一個の「個」として、足がすくむというか、慄然とするだけです。死というものは、集団的なものではなくて非常に孤絶したものです。そこに立ちあうわれわれも、やはり孤絶した存在なんだと。だからそこへ戻って自分の「個」というものの真贋というか、うその部分とまことの部分というものを冷酷に見たいと思いますね。

例えば、企業の腐敗・虚偽の問題もいっぱいありますね。商品に虚偽の表示をする。そういったことは日常茶飯事なわけですが、それは食品業界だけじゃなくて、教育界から宗教界からマスコミまで全部そうだと思います。実は自分に虚偽表示をしてわれわれは生きているのだと思いますね。

それでどこに根源を求めていくかというと、やはり僕は「個」のたましいのところにいくべきではないかと思います。「個」のたましいは、最終的には組織にも国家にもどうしてもなじまないものです。虚偽表示にしても、人間の一個体としては不正と認識し得ても、組織内では、あれは正当な行為になり得るわけだと思うんです。この不況下でコストや利潤を冷徹に考えたら、やむを得ない選択だという暗黙の了解が組織内にはある。そこでは「個」のたましいが無化し、解体されてしまっている。「個」の解体と組織優先という発想の日々の集積が、結局、人間の非人間性と全体主義というものを生むと僕は思っています。

今の社会は根源の悪というものが問われない。根源の悪というのは、英語でいえばシン（sin）だと思うんです。罪業です。しかし、クライム（crime）ばかり問われる。クライムとは犯罪です。犯罪というのは、時々の法律によって決められるものであって、普遍的にそれが罪業であるかどうかというのはわからないと思うんです。

例えば、アフガニスタンのように、毎年何万人もの子どもが餓死していたようなところを国際社会が傍観する、忘れたふりをする。そういう罪については一切問われない。民家の密集地に一トン爆弾を落としているのに、誰も声もあげない。そういう無関心という罪業については、誰も問わない。実は「人間はどこまで非人間的になれるのか」という設問では、そこに解答のヒントがあると思うんです。でも誰もそれを問わない。特に宗教は問わないわけですから。人間における非人間性とは何か――を宗教はもっと深めるべきではないでしょうか。僕は最悪の非人間性とは、直接的行動の残虐さだけではなく、実はいかなる人間ももっている「無関心」にあるのではないかと思っています。人間社会の壮大な無関心こそが、非人間性の最たるものである戦争を立ち上げるのではないかとも考えています。

戦後の日本の民主主義というのは、言ってみればアメリカ的な方法だったと思うんです。アメリカによってすでに考えられたことを、二番煎じ三番煎じで日本人が考える。アメリカによって結論づけられたものを日本人も後追いする。ベトナム戦争でも朝鮮戦争でもそ

うです。自分の眼であの凄惨（せいさん）な風景を見てきたわけじゃないんですね。

そこに、日本という国の卑怯な土壌というものがあると思うんです。例えば、ベトナム戦争に直接参戦しているわけじゃないというけれど、僕はこの間、アメリカでチョムスキー（言語学者ノーム・チョムスキー）と話して、本当にギクリとしました。「第二次大戦後のアメリカの戦争のほとんどすべてに日本は全面的に協力しているじゃないか」と。「死体の袋まで作ってやっただろう」と。そして「あなた方に、ブッシュ政権を批判する資格があるのか」と言われたのです。これは、まさにそのとおりだなと思いますね。

実は、アメリカ的な方法の中で生きているのに無関係を装っている。それが日本の戦後民主主義で、それがついに自壊したと思いますね。大敗北なんですよ。戦後民主主義には、生身のちゃんとした主体というものがなかったんですね。ひとりひとり血みどろになって戦うという決意も何もない。みんなで顔を隠した、ただの集合的気分でしかなかった。僕が年来言っている「鵺（ぬえ）のような全体主義」の主役とは、戦後民主主義そのものなんじゃないかと思うときもあります。個々の人間がちゃんと体をはってどうにかするという、つまり闘って殺されたわけじゃなくて、ある人の言葉によれば、戦後民主主義は「戦わずして死んだ、安楽死だ」と言いますね。だから、もっとも恥ずかしい死、不名誉な死だと思うんです。しかも度し難いのは、自称民主主義者がその死を認めていないということだと思います。

ブッシュ政権の戦争政策を批判するのは、いとも簡単なんですけれど、でも、世界広しといえども、ブッシュ政権にこれほど隷従している国も珍しい。今や、イギリスでさえ首を縦に振らない局面が出てきているわけです。今の小泉政権というのは、本当にアメリカの飼い犬みたいなところがある。われわれは反ブッシュを叫ぶだけでなく、この日本の隷属状況をも批判すべきです。そのことを、もう言いよどんではいけない。9・11をおもしろおかしく評論し、ブッシュ政権を強硬に批判しても、実は虚しいことです。肝心なのは、反テロ戦争という無期限、無限定の戦争を拡大しようとしている米政権に全面的支援を与えている日本政府にきっちりとものを言うことだと僕は思います。

今の日本の政治というのは、僕らに生き方を変えてくれと言っているわけです。今までは、隣近所と仲良くやっていたのが、「何か、事があったらちゃんと武力をもって構えろ」というふうに、人生観を変えろと言っているわけです。いざ、隣人あるいは隣町と何かあったら力で解決しろ、ちゃんとぶん殴る用意をしろと。やられる前にやってしまえ、と。それが有事法制というものです。僕はこれに百パーセント反対です。

いままで五十七年間、戦争を否定しながら生きてきたわれわれとしては、有事法制はまことに迷惑です。生き方を突然変えろと言われても、僕はいまさら変えたくない。僕としては今後とも反対を言いつづけるつもりです。有事法制は僕にとって、「人間はどこまで非人間的になれるのか」のテーマに即した問題なのです。

僕は表現の仕事をして、「言葉」で食っている。宗教もある意味で言葉で食っているんだと思います。でも、ただ偉そうに話せばいいというものではない。特に今みたいな危険な時代には、いちいちの言葉にどれだけたましいと身体を重ねて語るかが何より大事ではないでしょうか。たましいも身体も担保にしない表現はカスのようなものです。宗教者はとりもなおさず表現者でもある。そうした観点から、「人間はどこまで非人間的になれるのか」のテーマと同時に、「人間はどこまで人間的になれるのか」を宗教者は言葉でしっかり表現し、身体で実践し、人間存在の奥深さを証明するよう努めるべきではないでしょうか。（談）

（へんみ　よう・作家）

最新刊に『永遠の不服従のために』毎日新聞社